

渡嘉敷島におけるアマミタカチホヘビの記録

竹 中 踐

(科学教育研究会)

1984年12月9日～11日に渡嘉敷島（沖縄県，渡嘉敷村）において両生・爬虫類相の調査を行った。9日は天候は晴れ，阿波連から島の南へのびる林道周辺を探索した（図1）。海岸近くでカラスがハブの死体を持っていたという話が聞かれたが，調査を通してハブは目撃できなかった。林道わきにはシリケンイモリが点々といた。林道の西側に小さな山（標高156 m）があり，その林内に入った。林床で動物の動きに頻繁に出会ったが，それらはすべてシリケンイモリので踏まないように歩くのが大変なほどであった。その山の水の流れていない小さな沢を探索し， 沢にたまった落葉や土あるいは石を片手鋤でかきわけて（以下スクラッチングと呼ぶ）いたところ，湿った堆積物中からアマミタカチホヘビを掘り出した（図2）。林内での記録は以上であったが， ほかにも林道わきの草むらでアオカナヘビの幼体3個体とリュウキュウカジカガエル（別名ニホンカジカガエル）1個体を捕獲した。

10日は島の北部の大谷林道周辺を調査した（図1）。小雨が時々降る天候で林道周辺および林道に沿う側溝にはシリケンイモリが多く目についた。またイボイモリの成体，幼体各1個体とリュウキュウヤマガメ1個体もみられた。周辺の林床のスクラッチングで落木中からガラスヒバァ1個体を見いだした。午後は晴れ間も出て，その林道の南端から出たところの水田においてガラスヒバァが泳いでいるところも見られた。島の幹線道路である渡嘉敷から阿波連に至る道の側溝において，落ちて上がれずにいたシリケンイモリを多く見かけた。また以前に落ちて乾燥死したと思われる死体もあった。木の枝を側溝の底から上辺まで渡してやると生きているものは次々と伝い上がって出ていった。その夜は強風で条件は悪く阿波連林道の調査では何も記録できなかったが，阿波連の海岸付近でマダラトカゲモドキ1個体を目撃できた。

11日は渡嘉敷港と大谷林道の中間に位置する貯水池付近深探索したが，池周辺はやぶが



図1 渡嘉敷島調査の主な地名



図2 アマミタカチホヘビ

深く記録は得られなかった。貯水ダムから流れ出る小川(コンクリートで護岸されている)ではシリケンイモリが多く見られ、水中で雄が求愛行動をとっているところも見られた。大谷林道の入口付近も回ったが、晴れて乾燥してきていたせいかわ溝にはシリケンイモリはほとんど見られなかった。逃げ出せずに死ぬのは脱出口(側溝の割れ目や側溝への土砂の堆積)を見いだせなかった比較的小数のものであることが推察された。

今回捕獲したアマミタカチホヘビ (*Acalinus amamiensis*)は渡嘉敷島では初記録と思われる(池原ほか、1984; 当山、1984a, b.)。この個体は幼体で頭胴長135mm, 尾長63mm, 体重1.3g。アマミタカチホヘビの特徴である長い尾を持つ。腹板数は157, 尾下板数は93で、従来知られるアマミタカチホヘビの数値の範囲内にある(高良、1962)。通常の腹板の半分以下の大きさの鱗が7ヶ所に入っていたがそれらは数に含めていない。胴回りの鱗列数は頸部で23列, 胴中央で21列, 胴後部で21列, 尾前部で15列であった。胴中央部での比較では従来の数値の23列より少なくなっている(高良、1962)。

引用文献

- 池原貞雄・与那城義春・宮城邦治・当山昌直、1984. 陸の脊椎動物(琉球列島動物図鑑1) 352p. 新星図書.
- 高良鉄夫、1962. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告, 9 : 1-202.
- 当山昌直、1984a. 沖縄群島の両生爬虫類相(Ⅲ, 渡嘉敷島・久米島). 沖縄県立博物館紀要, 10 : 25-36.
- 当山昌直、1984b. 琉球の両生爬虫類. 沖縄の生物(日本生物教育会沖縄大会記念誌) : 281-300.

正誤表

10 ページ 6 行目

誤 *Acalinus amamiensis* 正 *Achalinus weneri*